

論文要旨

鹿児島大学

Effects of food neophobia and oral health on the nutritional status of community-dwelling older adults
(地域在住高齢者の食物新奇性恐怖と口腔保健が栄養状態に及ぼす影響について)

氏名 淀川 尚子

【背景】

高齢者における低栄養の傾向が世界規模で起こっており、喫緊の課題となっている。高齢者の食嗜好と口腔の健康状態は栄養摂取に大きく影響する。一方、高齢期には食物新奇性恐怖 (food neophobia) が高まることが報告されており、嗜好の幅を狭め、結果として高齢者に必要な栄養素の摂取量を減少させる可能性がある。しかし、食物新奇性恐怖と低栄養リスクの関係は明らかになっていない。本研究は、地域在住高齢者における食物新奇性恐怖症と口腔の健康状態が、低栄養リスクに及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

【対象と方法】

本横断研究は、65歳以上の地域在住高齢者238名（男性67名、女性171名、平均年齢 76.3 ± 7.3 歳）を分析対象とした。自記式質問紙を用いて、食物新奇性恐怖尺度、タンパク質摂取頻度、口腔関連QOLについて調査を行った。また、口腔機能の指標としてODK (oral diadochokinesis: /pa/, /ta/, /ka/) を測定した。さらに、栄養状態は、MNA® (Mini Nutritional Assessment) を用いて聞き取り調査を行った。統計解析は、基本属性や各変数の基準統計量を記述統計によって明らかにした後、MNA24点をカットオフ値として、栄養状態が良好な群（グループ1: 24点以上）と低栄養のリスクがある群（グループ2: 24点未満）に分類し、2群の比較とした。ロジスティック回帰モデルを用いて、調整オッズ比 (adj-OR) および95%信頼区間 (CI) を算出し、食物新奇性恐怖とタンパク質摂取頻度、口腔関連QOL、口腔機能に関連する低栄養リスク因子を特定した。統計解析にはSPSS ver.25.0 (IBM) を用いて、 $p < 0.05$ を統計的に有意とした。なお、本研究は、鹿児島大学医学部の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】

MNAは、低栄養リスクが65名 (27.32%)、栄養状態良好が173名 (72.68%) であった。高齢者における低栄養リスクと関連する因子は、食物新奇性恐怖 (adj-OR = 1.036, 95% CI: 1.007-1.067) が有意に高く、ODK (adj-OR = 0.992, 95% CI: 0.985-0.999) と口腔関連QOL (adj-OR = 0.963, 95% CI: 0.929-0.999) が有意に低かった。

【考察】

高齢者の食物新奇性恐怖が栄養状態に影響を及ぼすことが示唆されたことから、低栄養予防を目的とした食生活指導において個人の食物嗜好を把握することの重要性和有益な具体的取り組みの必要性を示すものであると考えられた。食物新奇性恐怖症の高齢者では、新規食品に関する情報を提供することで、食品の嗜好性が高まる可能性が考えられた。また、口腔保健関連QOLは、栄養不良リスクと有意に関連しており、個人が認識している口腔内の健康状態（機能的、社会的、心理的側面）を把握することが重要であり、臨床パラメータとともに口腔関連QOLの指標を用いることが、高齢者の栄養リスクを予測するのに有用であると考えられた。ODKは低栄養リスクと有意に関連しており、口腔虚弱の兆候として、口腔乾燥や口腔衛生状態の低下などの初期症状が観察されることから、口腔に関する些細な変化を察知し、早期に適切な介入を行うことで、口腔機能低下から低栄養への悪化を回避できる可能性が考えられた。

【結論】

低栄養リスクのある高齢者は、食物新奇性恐怖が高く、口腔機能および口腔関連QOLが低い可能性があり、低栄養の予防に寄与する要因として、高齢者が自覚する口腔の健康、口腔内に現れる口腔虚弱の兆候から低栄養リスクを予測し、個人の食物新奇性恐怖の状況を捉えた食事指導の実施などが挙げられる。これらの総合的アプローチは、高齢者の食習慣を多面的に理解した上で実施できる新しい栄養サポート戦略である。

BMC Geriatrics 22:334.2022年掲載 (IF 3.97)